
令和7年度 比内支援学校 全校研究について

1 研究主題

各教科の「目標」「内容」を明らかにした授業づくり
～生活単元学習を教科の視点で見つめ直す～
1年次／3年

2 研究主題設定の理由

(1) 過年度の研究から

本校では、相手や場所が変わっても発揮できる力、社会で活用できる力を「本物の力」と定義し、児童生徒が「本物の力」を身に付けることができるように、授業づくり、単元づくりに関する研究を続けてきた。令和4年度までの研究で、「授業づくりの5つのポイント（H30）」「単元づくりの要点（R4）」等の有効点を見出し、日々の指導で教師が活用できる形になってきている。

令和5年度、6年度の2年間の研究では、それらの有効点に加え、振り返りの充実について実践を重ねた。授業における振り返りでは、「振り返りの視点」というツールを導入して本時の学びに価値付けをしたり、前時の学びを思い出す時間を導入部分で設定したりする方法を実施した。また、単元終了時には単元全体を振り返り、できるようになったことや次にやってみたいことについて文章にまとめたり、発表したりといった言語化をする時間の設定も行った。それらによって、児童生徒が学んだことを活用して課題を解決しようとする姿や、自分自身の成長や次の活動への意欲等を言葉で説明する姿を引き出すことができた。また、言葉でのやり取りが難しい児童生徒も、自分の姿を動画や写真で振り返り、頑張りに対して友達から称賛を受ける時間を設定したことで、次時への期待感を高めたり、笑顔で学習活動に取り組んだりする姿を引き出すことができた。今年度も昨年度までの研究成果及び課題を踏まえ、「本物の力」の育成に有効な手立てについて研究活動を推進していく。

一方で、生活単元学習を始めとする各教科等を合わせた指導を通して、どの教科の「目標」達成をねらい、どの「内容」を扱うのかということが見えにくく、行動面での評価はできているものの、育成を目指す資質・能力が身に付いたのかという教科の視点での評価には検討の余地がある。どのように教育内容や時間を配分するかも考慮しなければならず、長期的な計画、学校全体での共通理解が必要であると考え、3か年の研究とした。今年度はその1年目として「生活単元学習」に焦点を当て、含まれる教科の「目標」「内容」を明らかにしていく。併せて、学校全体の授業力やチーム力を高める職員研修や、職員一人一人の研究への参画意識を高められるような工夫にも力を入れていきたい。

(2) 学習指導要領から

各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力・情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習の充実や、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。これらの取組の実現のためには、学校全体として、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めることが求められる。（「学習指導要領解説 改訂の基本方針」より抜粋）

(3) 学校の現状と児童生徒の実態から

本校は昭和49年に開校し今年度で創立52年目となる。全校児童生徒数は118名（小学部35名、中学部26名、高等部57名）である。児童生徒については、障害の多様化の傾向にあり、情緒の安定やコミュニケーション、集団参加に課題がある児童生徒や、各学部数名ずつ生活全般に介助を要する児童生徒が在籍している。広大な農場、開校当時から本校に理解のある地域とのつながり、新校舎の機能という本校の特色を生かした教育活動を計画的に展開し、定期的に児童生徒の変容を見取りながら学習内容を発展させることで、幅広い実態の児童生徒が自立的に社会参加するために必要な「本物の力」を育成できると考える。

以上のことから、学校や地域の特色を最大限に生かしながら、学習活動を展開する中で児童生徒が「本物の力」を身に付けられるような授業づくりを推進する。これまで取り組んできた「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」、「課題を解決する力を育てる単元づくり」を基盤に、授業づくりに取り組み、児童生徒が楽しみながら挑戦する中で、各教科等で育成を目指す資質・能力を育むことのできる授業づくりをし、目指す姿の実現を図りたい。

3 研究の目的及び目標

研究の目的は、生活単元学習において、各教科の「目標」「内容」を明らかにし、育成を目指す資質・能力を確実に身に付けられる有効な手段を探ることである。そのために、次の目標を設定する。

- ・生活単元学習において育成を目指す各教科等の資質・能力を明らかにするとともに、興味・関心を把握し、一人一人が意欲的に力を発揮できる単元構成や、学校と地域社会の双方にメリットのある地域展開に向け目標の共有を図る。また、教科別の指導との関連付けを図りながら指導時期や指導内容を精選し、資質・能力を効果的に育むために、教科等横断的な学習の充実を図る。
- ・生活単元学習において各教科の「目標」を達成したかどうかをどのような言動から見取るかをあらかじめ決めておき、抽出児童生徒を中心に、その行動の変容を定期的に記録する。また、教師は児童生徒の行動面での変容と教科の目標達成とを結び付け、児童生徒本人が自身の学びや成長を実感する機会を設定し、言語化による価値付けを行う。

4 研究仮説

過年度の研究で見出された授業づくり、単元づくりの要点を活用しながら、地域と目標を共有した生活単元学習を展開する。あらかじめ教科の「目標」「内容」を明らかにして生活単元学習を展開することで、一回の授業や小単元のまとまりの中でも各教科の資質・能力を身に付ける視点で授業づくりができるようになり、児童生徒の「本物の力」を育成することができるだろう。

5 研究の内容と方法

(1) 全校授業研究会及び公開研究会に向けた授業づくりと授業の改善

- ・全校授業研究会及び公開研究会に向けた授業づくりでは、指導案作成前に「授業づくりワークシート（別添1）」を使用して児童生徒の実態やこれまでの学習の経緯について整理した上で、各教科のどの「目標」達成を目指し、どの「内容」を取り扱うのか、どのように各教科を合わせて指導するのかを検討する時間（指導案検討会、単元検討会、チーム一授業研究会）を設定する。単元を検討しつつ、単元や小単元といった一定の時間のまとまりを意識した授業づくりに取り組む。
- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた授業づくりをするために、過年度の研究を通して得た「単元づくりの要点」や「授業づくりの5つのポイント」「振り返りの視点」を活用する。また、各学年で抽出児童生徒を決め、エピソード記録や単元終了時の振り返りを行うことで計画的に児童生徒の変容を見取り、単元や授業を評価・改善する。（*授業研究会の指導案には抽出児童生徒に加えて2名の個別の目標を記し、実態の異なる児童生徒の目標についても明らかにする）

(2) 単元や授業を通して各教科の「目標」を達成したかを判断する評価規準の設定

- ・単元づくり、授業づくりにおいて、どのような発言や行動、他者との関わりが見られたときに、各教科の「目標」を達成したと判断するかの評価規準を決めておく。また、各教科の「目標」を達成するために、教科のどの「内容」を扱うかについても年間指導計画検討会や各授業研究会の際に協議し、児童生徒の実態に合った「内容」や段階であるか、評価・改善を図る。
- ・一回の授業及び小単元などのまとまりの中で、児童生徒のどのような言動から各教科の「目標」を達成したと捉えるかを決め、あらかじめ授業者間で共通理解を図った上で指導に当たる。めあてに対するまとめの達成度、理解度を確認する発問や、振り返りの視点に基づいた発問については、指導案上に明記する。また、学習集団の人数や活動の数によっては同一の目標とはならないため、抽出児童生徒を中心とした指導案の「個別の目標・評価規準」に記載する。
- ・各教科の「目標」を達成したと判断する行動が、どのような状況下で見られたかについても重視する。例えば、場所は「家庭」、「校内」、「学校周辺地域」のどこで見られたか、手立てはどの程度講じたのか、相手は「家族」、「友達」、「教師」、「初めて会う人」の誰だったのかなどが考えられる。地域と目標を共有した上で単元づくりを進め、相手や場所が変わっても学んだことが発揮されたかを評価する「評価規準」を教科の「目標」から設定する。

(3) 年間指導計画検討会の実施と各学年の計画の共有

- ・年度始めに年間指導計画検討会や単元検討会を行う。年間指導計画検討用紙（新様式）を用いて前期と後期の生活単元学習の軸となる単元を考え、主たる教科を可視化する。前期、後期の単元が終わったタイミングで評価も行い、次の学習でどのような教科を配列するかを考えるきっかけとする。また、前年度、今年度、次年度の3年間でどの教科の目標を主として生活単元学習に組み込んだのかが一目で分かる様式を年間指導計画（新様式）として提示する。
- ・地域資源の活用や、校内資源の活用（他学部や他学年との効果的な共同学習）を推進するために、各学年の検討用紙を全校で共有する。また、取組を研究部報で取り上げ、職員に周知する。

(4) 職員研修の実施

- ・年度始めに本校教職員に対してアンケートを実施し、単元づくり、授業づくりのどの部分に難しさを感じているかを調べ、職員のニーズに応じた研修を設定したり、研究部報「研究部だより」を通じて情報発信をしたりする。
- ・児童生徒が学びや成長を実感できるまとめや振り返りの在り方、身に付けた資質・能力の活用につながる授業づくりや単元づくりに向けた研修会を他の分掌部と連携しながら行う。
- ・大館市内の小・中学校（通常の学級）の授業参観を通して、授業の導入や展開、まとめ及び振り返りについて様々な方法に触れ、日々の授業実践に生かす。
- ・年度末にもアンケートを実施し、年度始めで感じていた単元づくり等における難しさを研修や情報共有によって改善できたかを評価する。

(5) チームー授業研究会の実施

- ・小学部1年生～高等部3年生までの12学年で生活単元学習の授業で授業研究を実施する。（授業提示、研究協議をそれぞれ年間12回実施）
- ・チームは学部を越えたチームメンバー4～5人で編成する。教職経験年数等に応じた研修内容になるように役割分担も行う。チームメンバーは授業者、リーダー、サポーターに分かれ、提示授業に向けて授業者をサポートする。また、チームメンバーは全員が必ず授業を参観し、協議資料や指導助言を蓄積することで、次のチームの授業づくりに活用できるようにする。

6 研究計画




〈1年次〉

月	全体・学部	段階	研究活動の評価の観点
4	<ul style="list-style-type: none"> 全体研究の立案 全校研究会①14日（研究の概要提示） 年間指導計画検討会①23日 	計画	<ul style="list-style-type: none"> 研究の目的の達成に向け、全体研究での取組が学部研究に適切に反映され、各学部周知されているか。
5	<ul style="list-style-type: none"> 研修日①7日 全校研究会②21日（学部研究の概要提示） 		
6	<ul style="list-style-type: none"> 研修日②11日 ◎チーム一授業研究会の開始（令和7年6月から令和7年1月まで） 	実践・評価	<ul style="list-style-type: none"> 単元の構成や課題設定、評価の場面や方法を計画し、評価規準を指導者間で共有しながら単元づくりや授業づくりをしているか。 本時の学びを明確にした上で、めあて（課題）や発問を工夫しているか。 児童生徒が学びの見通しをもったり、自身の学びや変容を実感したりするために振り返りを工夫しているか。 めあてから活動内容、まとめ、振り返りがつながっているか。 「授業づくりの5つのポイント」や「単元づくりの要点」「振り返りの視点」を活用した授業づくりをしているか。 「各教科等を合わせた指導」において、「各教科」のどのような「目標」や「内容」を扱うか指導者間で共有したり、教科別の指導と関連付けて効果的な学習を展開したりしているか。また、それらの達成状況が定期的に評価され、指導に反映されているか。 授業における学びが当該授業以外の場面でも活用されるような工夫をしているか。
7	<ul style="list-style-type: none"> 第1回全校授業研究会9日（中学部） 第2回全校授業研究会16日（高等部） 夏季職員研修23日（図書情報教育部と共催） 年間指導計画検討会②24日（前期の評価） 		
8	<ul style="list-style-type: none"> 研修日③20日 		
9	<ul style="list-style-type: none"> 第3回全校授業研究会10日（小学部） 		
10	<ul style="list-style-type: none"> 研修日④15日 		
11	<ul style="list-style-type: none"> 研修日⑤26日 		
12	<ul style="list-style-type: none"> 公開研究会10日 全校研究会③24日（研究の進捗状況の確認） 研究紀要の原稿執筆 		
1	<ul style="list-style-type: none"> 年間指導計画検討会③9日 研修日⑥（冬季職員研修）21日 	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の変容とその要因が明確になっているか。 成果や課題、次年度への方向性が仮説に基づいてまとめられているか。
2	<ul style="list-style-type: none"> 年間指導計画検討会④12日 全校研究会④18日（研究の成果と課題報告） 研究紀要の印刷・丁合・製本 		
3	<ul style="list-style-type: none"> 研究紀要の完成・配付 3月15日頃 		

7 具体的な取組

(1) 全校授業研究会及び公開授業研究会に向けた授業づくりと授業の改善

- ・全校授業研究会では、単元構想段階で授業者、学部主事、学部研究担当、研究主任で集まり、単元検討会を実施した。その際「授業づくりワークシート（別添1）」を活用し、児童生徒の目指す姿と学習指導要領に示された各教科の「目標」を整合させ、生活単元学習を通してどのような資質・能力を身に付けるのかを明らかにした上で単元の目標を設定した。その際に、「知識・技能」、「思考力・判断力、表現力等」、「学びに向かう力・人間性」の三つの柱をまとまりで捉えることに留意し、「授業づくりワークシート」を活用しながら次の（表1）で示す流れで単元を構想した。また、指導案に記載した指導計画にはどの小単元でどの「内容」を扱うかについても明記し、計画的に指導を行った。

項目	検討事項	参考資料・参考文献
1 実態把握 	・前年度からの引継ぎ情報に加え、年度初めに担任が見取った児童生徒の様子（得意・不得意、興味・関心、課題等）と目指す姿について大まかに整理する。	・自立活動実態把握表 ・個別の教育支援計画 ・個別の指導計画
2 目指す姿と各教科の「目標」の整合 	・目指す姿を実現するために、生活単元学習を通してどの教科の「目標」を扱うかについて、学習指導要領解説各教科等編の目標・内容一覧から該当するものを選出する。 各教科の「目標」を基に単元目標の設定 ※【小学部3年生：国語・生活】【中学部2年生：国語・社会・理科】 【高等部3年生：国語・保健体育・音楽】	・学習指導要領解説各教科等編
3 単元目標を達成するための各教科の「内容」の選択 	・昨年度の学習で扱った各教科の「内容」に印を付けた「指導内容確認表（熊本大学教育学部附属特別支援学校）」を基に、単元目標を達成するための具体的な教科の「内容」を選択する。 ・行事との兼ね合いや指導可能な時数、児童生徒の興味・関心、具体的な指導方法などを総合的に考慮し単元で主軸となる題材について検討する。	・学習指導要領解説各教科等編 ・指導内容確認表
4 具体的な題材の設定	各教科の「内容」を基に単元の主軸となる題材の設定 ※【小学部3年生：絵本】【中学部2年生：ひまわりの栽培】【高等部3年生：よさこい】	

※全校授業研究会で授業提示をした学年

【表1：「授業づくりワークシート」を用いた単元構成の例】

- ・3回に渡る全校授業研究会実施後に指導助言者からどのような助言をいただいたかについても要約して一覧にまとめた（表2）。

	小学部3年生（9月）	中学部2年生（7月）	高等部3年生（7月）
授業概要	大館市内の図書館を訪れ、絵本の楽しさに触れたことをきっかけに、読み聞かせをする単元を開始した。絵本の読み聞かせを通して、適切な言葉や態度で思いを伝え合ったり、自分の役割を果たした達成感を味わったりする姿を目指した。 <u>国語</u> ・ <u>生活</u>	東日本大震災後に瓦礫から芽を出した「ど根性ひまわり」を育て、夏祭り来場者に、ひまわりに関するクイズやゲームを楽しんでもらう活動を行った。単元を通して、計画や予想を立てながら自分たちで物事を進める力を身に付けることを目指した。 <u>理科</u> ・ <u>社会</u>	学校の伝統である、よさこい演舞「絆舞桜」の演出を考え、地域のイベントで披露するという活動を行った。よさこいの演出や振り付けを考える活動を通して、課題を発見して筋道を立てて考える力や友達と伝え合う力を高めることを目指した。 <u>国</u> ・ <u>社</u> ・ <u>音</u> ・ <u>保体</u>
指導助言者	秋田県総合教育センター 主任指導主事 高橋亜希子氏	秋田大学教育文化学部 准教授 鈴木徹氏	本校 教頭 布田美香子 本校 教育専門監 藤田久美子
指導助言 (要約)	<p><u>生活単元学習と教科の「内容」の関連性</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導案の指導計画に、生活単元学習で扱う教科が具体的に示されている。なぜこの教科の「内容」を生活単元学習で扱うのか、説明できるようにするとより効果的である。 <p><u>自分の頑張りへの気付きと教師の評価の在り方</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の姿から「できた」「できなかった」を見取り、評価をするのではなく、学びの過程での頑張りに目を向け、評価していくことが大切。総合的に評価するとともに、児童自身が自分の頑張りを自覚できるようにしていくことが必要である。 	<p><u>地域とは？誰のために、何のために？</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが具体的な「誰か」を思い浮かべていない可能性がある。地域で関わる相手が具体的に分かり、目的をもって活動できるような授業を組み立てる必要がある。 <p><u>教科の視点に偏るリスクとバランス</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科に着目することで、他の価値ある行動が見えなくなるリスクがある。教科の目標にとらわれず、多様な子どものよさを見失わないように注意する必要がある。「一つのことに着目する」ことのメリット・デメリットを意識しながら、教科の視点と子どもの価値ある行動の見取りとのバランスを大切にしたい。 	<p><u>「自分事」として学びに向かうための問い</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味・関心・意欲を土台に、発言を引き出す問いや内面に揺さぶりを掛ける問いによって、「自分事」として学びに向かう姿が生まれる。生徒の発言を待ち、問いの準備とゴールの明確化が必要。 <p><u>振り返りの位置づけと成果の言語化</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ「振り返り」を行うのか、どのタイミングで行うのが適切なのかといった「振り返り」の位置付けを再確認し、今後の授業づくりの中で考えていく必要がある。「やり切った」で終わらず、視点をもって成果を言語化し、次の単元・学びにつなげることが重要である。

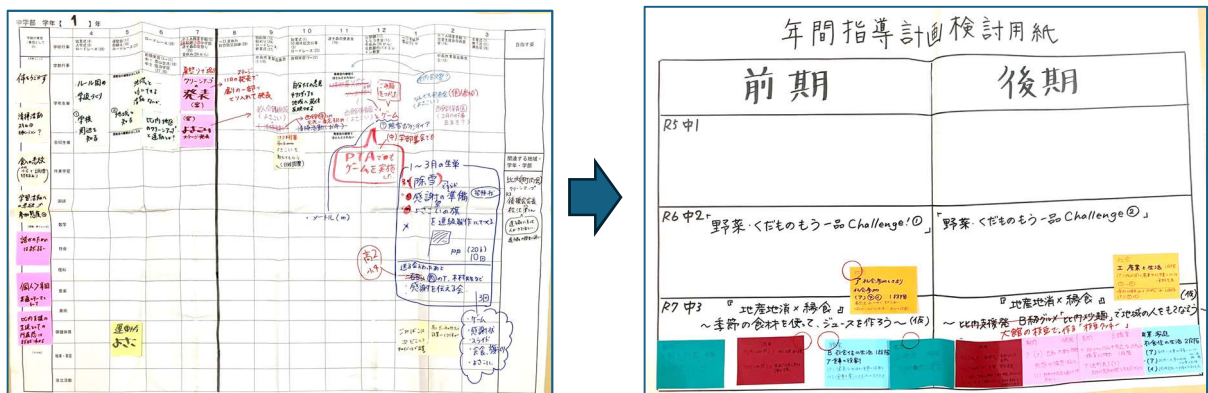
【表2：全校授業研究会の授業の概要と指導助言】

（2）単元や授業を通して各教科の「目標」を達成したかを判断する評価規準の設定

- ・全校授業研究会、公開授業研究会において、各学年の抽出児童生徒の「個別の目標・評価規準」を指導案上に明記した。また、どのような発言や行動、他者との関わりが見られたときに、各教科等（自立活動の目標を含む）の「目標」を達成したと判断するかは個別の評価規準を決め、本時の流れの中でその発言や行動を引き出すための発問についても教師の手立ての該当部分に波線を引き授業者が授業中に意図して発問できるようにした。

（３―①）年間指導計画検討会の実施と各学年の計画の共有

- ・今年度から年間指導計画検討会で使用している検討用紙の様式を変更した（図１）。旧様式は「各教科等を合わせた指導」と「教科別の指導」の関連付けについては有用であった一方で、学習活動の実施時期や単元計画の内容配列に活用することを意図しており、各教科等を合わせた指導の中でどの教科の「目標」「内容」を扱うかが見えにくかった（平成３１年度の本校研究紀要でも課題として挙げられている）。また、１年につき１枚の検討用紙を使用するため、前年度、今年度、次年度といったまとまりで計画することには課題があった。そこで新様式は１枚の検討用紙に３年分を掲載できるようにしている。生活単元学習に特化した様式ではあるが、小学部１～３年、小学部４～６年、中学部１～３年、高等部１～３年と３年刻みでどの教科の「目標」達成を目指して生活単元学習を実施してきたかを一目で把握できるため、年度末の引継ぎにも活用することが期待できる。
- ・生活単元学習の具体的な活動や「教科別の指導」との関連付けをすることを目的とするのではなく、その活動を通してどのような資質・能力を児童生徒に身に付けてほしいのかを明確にすることを目的として年間指導計画検討会を実施した。



【図１：年間指導計画検討用紙旧様式（左）と新様式（右）】

- ・前期（４月２３日）に１回目の年間指導計画検討会を行った。学年ごとに作成した年間指導計画検討用紙は、検討会後に一か所に集め、活動を通して達成を目指す各教科の「目標」や内容について共有を図った。学年の生活単元学習の年間指導計画にも検討会で話し合った「目標」を明記し、「内容」に関しても追記した。
- ・また、夏休み中（７月２４日）に前期の単元で掲げた各教科の「目標」の達成状況についても評価をし、後期の単元を検討する際に活用した。

（３―②）地域を効果的に活用した生活単元学習の実践事例を共有

- ・年度初めに実施した全校職員へのアンケートでは効果的な地域展開の有用性について理解はしているものの、単元構想の仕方や地域との連携に関して難しさを感じている教員（教諭・講師）の割合が６２％であった。そこで、単元目標達成に向け、地域資源や校内資源（他学部や他学年との共同学習を含む）をどのように活用するかを考えるための参考資料として、過年度の優れた実践とそれに伴って生徒がどのように成長したのかを研究部報「研究部だより」で全校職員に配付するとともに、「過年度までの研究成果（授業づくりの５つのポイント）（単元づくりの要点）（別添２）」と共に職員室内に掲示した。
- ・今年度の指導主事計画訪問で御指摘をいただいた「地域展開をする目的の明確化」についても、公開研究会の前に「指導案チェックリスト（別添３）」として全校職員に資料を配付し、確認をしている。地域を活用することを目的とするのではなく、あくまで児童生徒が資質・能力を身に付け、それらを発揮できたかどうかを判断する手段として活用することについても、継続して共通理解を図っていきたい。

(4) 職員研修の実施

- ・職員アンケートで「研修で取り上げてほしい」という意見が多かったＩＣＴの効果的な活用に関する研修会を、夏休み中に図書・情報教育部と協力して実施した。研修は授業の①導入、②展開、③終末の３グループに分けて希望を取り、グループに分かれて効果的なＩＣＴ活用に関する内容を扱った。参加した職員からは「これまでやってきたＩＣＴ機器の扱い方について正しかったと改めて確認できてよかった」という意見や「基本的な操作について知ることができ、すぐにでも実践してみたい」との意見が聞かれた。児童生徒が感じている学習上の困難さを克服するために教務部や図書・情報教育部など他の分掌とも連携しながら自立活動の視点も踏まえ、引き続き研修を実施していきたい。

(5) チーム一授業研究会の実施

- ・(表１)と同様の流れで、チーム一授業研究会に向けたチームごとの検討会でも「授業づくりワークシート」を活用し、チームごとに授業づくりを行った。チーム一授業研究会の授業提示者からは「各教科等の目標達成に向けて授業を構想する際に、他学部職員からたくさんのアイデアをもらうことができた」「授業後の協議会でもたくさんの改善案をいただくことができ参考になった」との声があった。チームリーダーの協力の下、複数回授業づくりに向けた検討会を経て、生活単元学習（小１は遊びの指導）の中でどの教科の資質・能力を育成するかを明らかにした上で具体的な授業デザインについても活発な意見交換ができた。また、研究部だよりでチーム授業研究会での教科の目標の達成状況や指導助言についても全校職員に共有を図り、次の授業者に引き継げるようにした。板書の写真や様々な工夫がされた教材、提示授業当日に至るまでの打ち合わせの記録の詳細についても研究部が管理する共有のファイルに綴じ込み、今年度の授業実践の成果を確実に次年度の授業づくりに生かせるようにしている。また、「ロイロノート」を活用し、授業の動画を蓄積することで必要に応じて教師が自己の授業を振り返ったり、授業を実際に見に行くことができなかった職員も必要に応じて授業の動画を視聴したりすることで、日々の授業づくりに生かせるようにした。

8 成果と課題

今年度から研究主題を新たに設定し、全校授業研究会、チーム一授業研究会を中心に研究を行ってきた。各教科の「目標」「内容」を明らかにした生活単元学習の授業づくりで次のような成果と課題が得られた。

(1) 成果

① 全校授業研究会での「授業づくりワークシート」を活用した単元づくり・授業づくり

「授業づくりワークシート」を活用し、児童生徒の実態把握、目指す姿と各教科の「目標」との整合、各教科の目標を達成するための「内容」の選択、指導計画の作成といった流れを全校授業研究会やチーム一授業研究会を通して全校で共有することができた。また、指導案に具体的な発言や行動での評価規準を設定したことで、教師による意図的な発問設定につながった。

全校授業研究会を通して、秋田県総合教育センター高橋主任指導主事からは生活単元学習と教科の「内容」の関連性や評価の在り方に関して、秋田大学教育文化学部の鈴木准教授からは、地域を具体的にイメージできる工夫や教科の目標にとらわれることへのリスクについて御助言をいただいた。年度の前半に各学部の授業や研究に関して御助言を得られたことで公開研究会に向けた日々の授業づくりに生かすことができた。

② 「年間指導計画検討用紙」の様式変更による、教科の「目標」の明確化

生活単元学習は数時間で終了する単元もあれば数か月に及ぶ長期単元になることもある。特に長期単元では、指導を継続する中で生活単元学習に含まれる各教科の「目標」や「内容」が見えにくくなり、本時の行動目標に焦点が当たることもしばしばある。しかし、年間指導計画検討会で各教科の「目標」を絞ったことで単元終了時に教科の「目標」の達成状況を振り返り、次の単元につなげている学年も出てきた。

中学部1年生の生活単元学習では「理科」と「数学」の目標を設定して単元を構成した。教科の「目標」を達成するために必要な各教科の「内容」を配列し、知識・技能を習得する時間を設定した後、夏祭りでの出店でゴムの性質を利用したゲームを企画して来場した地域の方々や保護者に楽しんでもらう授業を展開した。

また、小学部5年生ではチーム一授業研究会の授業提示で「国語」と「生活」の目標を掲げ、単元づくりを行った。話し合い活動と調理を主な活動内容とし、調理をしたクッキーについて、考えたことを順序立てて説明する力を育成しようとする授業を展開しており、目指す姿を実現するための教師の手立ても明確になっていた。

知的障害の特性として、学んだことが断片的になり、実生活に汎化することが難しいことが挙げられるが、2つの実践例では生活単元学習という指導形態で複数の教科を組み合わせ、一連の流れの中で習得を目指すことをねらう教師の意図が見られた。その他にも各学部、各学年の実践で目標の達成状況について振り返り、行動面や態度面での評価を受けて教科の目標が達成されたかを見取る様子が見られた。

今年度は3か年の研究計画の1年目ということで生活単元学習に焦点を当てた。年間指導計画検討用紙の記載内容と学年主任への聞き取りにより、各学年の生活単元学習で主たる教科として掲げる教科の「目標」が明らかになった。(表3)。

学部	学年	前期	後期	考察
小	1年生	国語、生活、図工	国語、生活	・生活に重きが置かれている。国語と合わせて指導することで、学びを言語化し、身に付けたことを発揮できるよう工夫している。
	2年生	国語、生活	国語、生活	
	3年生	国語、生活	国語、生活	
	4年生	生活、(自立)	生活、(自立)	
	5年生	算数、生活	国語、生活	
	6年生	国語、算数、生活	国語、保体	
中	1年生	理科、数学	理科、数学	・課題解決のプロセスが重視されている。学んだことを発揮する場として地域を活用している。
	2年生	理科、社会	社会、職家	
	3年生	社会、職家	国語、社会、職家	
高	1年生	国語、社会、美術	国語、社会、職業	・各学年で題材が決まっており、育成を目指す資質・能力が題材ごとに配置されている
	2年生	職業、道徳、(自立)	社会、家庭	
	3年生	国語、音楽、保体	国語、音楽、保体	

【表3：各学年の生活単元学習で達成を目指す各教科の目標一覧】

③ チーム一授業研究会の実施による全校体制での授業づくりの推進

年度初めに小学部1年生から高等部3年生までの12学年に対応した12人のリーダーを決め、リーダーがチームの組織運営を担う形で授業づくりを進めることができた。チームによっては研究部が設定した研修日以外にもメンバーを集め、何度も授業づくりに関して意見を出し合う機会を設定したり、授業提示の前にプレ授業研究会を開催して授業者の動きや教室の環境設定に関してアドバイスをしたりしてチームごとに研修を進めた。主体的な授業づくりの組織運営についてもリーダーの先生方の協力を得られたことで大きな成果が得られ、ベテラン教員と若手教員が力を合わせたことで、全校職員の研究への参画意識が高まった。

(2) 課題

① 各教科の「目標」を生活単元学習の「目標」とし、評価することの難しさ

学習指導要領解説各教科等編（小・中学部）には「各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科等の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要となる」とある。そのために、今年度担任する教師による実態把握だけではなく、各種知能検査の結果や過年度までの学習履歴を的確に把握した上での目標設定が鍵となると考える。

しかし、10月に全校職員を対象にしたアンケートでは各教科の「目標」を生活単元学習の目標として設定することに難しさを感じる職員が全体の95%という結果となった。

② (表3)の中に含まれていない教科をどのように指導していくか

生活単元学習の目標として主たる教科の目標を明らかにすることができた一方で、「表に含まれていない教科はどのように指導するか」という課題が生じるため、解決策を考えていかなければならない。

(3) 今後の取組について

① 「各教科等を合わせた指導」の実践例の積み重ね

課題①に示されたように各教科の「目標」を生活単元学習の「目標」とし、評価することには難しさはあるが、全校授業研究会やチーム一授業研究会を通して、よりよい授業づくりや学習指導要領の実現に向けた実践を3年間積み重ねていきたい。

② 生活単元学習以外の「各教科等を合わせた指導」も視野に入れた単元の設定

(表3)に含まれていない教科の「目標」「内容」をどのように計画的に指導していくかを考える際、生活単元学習以外の「各教科等を合わせた指導（日常生活の指導、遊びの指導、作業学習）」においても目標や内容を明らかにしていく必要があり、今後の取組として検討していきたい。

9 考察

今年度の研究主題は「各教科の「目標」「内容」を明らかにした授業づくり～生活単元学習を教科の視点で見つめ直す～」としている。年度初めに研究主題を提示した際、一部の職員から「教科色の強い生活単元学習をすればよいということか？」との疑問の声があった。おそらく、各教科等を合わせた指導で教科の「目標」「内容」をどのように取り扱うか、あいまいな部分があるためこのような疑問が生じたと思われる。

本校では昨年度までの研究でも生活単元学習を中心に授業づくりと単元づくりに取り組んでおり、生活単元学習を教育課程の中心に位置付けている。それは、これまで長年にわたり知的障害のある児童生徒が生活単元学習の一連の流れの中で学んだことを発揮し、成功経験を積み重ねていくことで、場所や相手が変わっても発揮できる力「＝本物の力」を身に付けてきた実績があるからである。つまり、生活単元学習は「本物の力」を育成する上で非常に効果的な指導形態であると

考える。

ここで押さえておかなければならないのは、「各教科等を合わせた指導」は各教科の「目標」「内容」を効果的に学ぶ「指導形態」の選択肢の一つであるということである。課題①でも学習指導要領解説の一節を抜粋して紹介したが、生活単元学習の授業を組み立てる際には、あらかじめどの教科の資質・能力を身に付けてほしいかというところからスタートすることが重要であるとする。

3か年の研究で、生活単元学習に加え、各教科等を合わせた指導（遊びの指導・作業学習・日常生活の指導）についても「目標」と「内容」を明らかにし、教科別の指導とも関連付けを図ってきたい。

併せて、教務部と研究部が連携し、年間指導計画や、個別の教育支援計画、個別の指導計画、自立活動実態シート等を日々の授業に生かすシステムづくりも3年間を掛けて計画的に進めていきたい。

授業づくりワークシート（チーム研・全校研用）

みんなで
がんばるぞー



授業者

【1：実態把握】←授業者が記入

児童生徒はどのような人数構成ですか？（例：○学部○年生は、男子○名女子○名～～～からなる。）

これまでの学習経験は？（例：これまで、清掃活動・調理などの活動を通して地域の方に喜んでもらう経験を積み重ねてきている）

これから身に付けてほしい力は？→教科の「目標」と生徒の「課題（次の目標）」をリンクさせてみましょう！

（例：一方で、困難な場面に直面した際、次はどうすればうまくいか予想や仮説を立てる力（理科）が十分に育っていない。また、社会に主体的に関わろうとすることや、自分たちの取組が地域社会とどのように結びついているか（社会）も十分理解していない時がある。）

メンバーの先生からのコメント（授業者の先生へのエールなども含めていただけるとありがたいです）

【2：目指す姿（教科の「目標」）】←特別支援学校学習指導要領各教科編 より

（例：P. 560 中学部【社会】教科の目標(1)～(3) 特に(3)学びに向かう力、人間性等
P. 584 中学部【理科】教科の目標(1)～(3) 特に(2)思考力、判断力、表現力等）

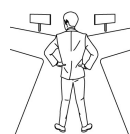
【3：どの教科の「内容」達成を目指すか】←【2：目指す姿（教科の「目標」）を達成するために…】

（例：P 561【社会】オ 我が国の地理や歴史、P 585【理科】A 生命ア（ア）○ア、1段階）

【4：どの題材を扱えそうか】←【3：どの教科の「内容」達成を目指すか】を合体させるイメージで

（例：【社会】の○○の内容と【理科】の○○の内容を合体させて、地震に備えたハザードマップづくり）

研究部だより



各教科等の「目標」「内容」を明らかにした授業づくり

～生活単元学習を教科の視点で見つめ直す～

（1年目 / 3か年研究）

研究部報 2号
令和7年6月2日（月）
文責：榎本 昌太郎

昨年度までの研究で明らかになった「単元づくり」「授業づくり」の要点です。

単元づくりの要点（R4. 紀要）

- ①主体性、意欲の喚起と継続
- ②知識・技能の習得と繰り返しの活用
- ③中間評価の機会の設定
- ④児童生徒自身の成長の実感や達成感の獲得

単元づくりの要点に関する
詳細はウラ面にあります。
こんな要点がある！ということを知っていただき、授業を組み立てるときに活用していただけたら嬉しいです！



授業づくりの5つのポイント（H30. 紀要）

- ①主体的に取り組める学習の目的や学習課題の設定
- ②自分たちで学びを進めていける学習活動と学習環境の設定
- ③「知識・技能」を学び、活用（思考・判断・表現）する機会の設定
- ④自分や他者との対話的な思考を生み出す「つなぐ支援」
- ⑤うまくいった（いかなかった）理由や次の方策を語る機会の設定



単元づくりの要点

要点① 主体性、意欲の喚起と継続

- 依頼を受ける、招待する等、相手（第三者）が登場する単元を設定する。
- 地域と目標を共有し、地域のニーズと学校のニーズをすり合わせて学習活動を計画する。
※事前の打合せで授業者のねらいを相手に理解してもらい、実際の交流場面で掛けてもらう言葉や
いただく評価等の仕掛けを大切にする。
- 児童生徒にとっての本時のゴールと単元のゴールを明確に示す。
- 課題解決に対して必要感、責任感、期待感、問題意識等を感じられるようにする。

要点② 知識・技能の習得と繰り返しの活用

- 単元の序盤に知識や技能の習得機会を設定し、その後の活用場面につなげる。
- 課題解決、成功体験を繰り返しながら、徐々に課題を発展させる。
- 敢えてやり方を変更したり、手立てを減らしたり、支援する教師を変更したりする等して活動の難
易度を上げていく。
- 児童生徒が取り組む課題に、解決する必然性をもたせる。
- 単元の中でできるようになったことを普段の生活に結び付ける工夫をする。
(学部、校内、家庭、地域で生かす)
- 内容や学習の流れを前に実施した単元と同じような設定にする。

要点③ 中間評価の機会の設定

- 制作物や発表等について依頼を受けた相手もしくはその他の誰かから評価を得て、改善に生かす。
その際には試行錯誤した部分や工夫した点についても見てもらい評価を得る。
- 児童生徒の言葉を引き出して、自身の言葉で語る振り返り場面を設定する。
- 児童生徒が学習に取り組む様子から、何がどのくらいできるようになったのかを教師が見取りその
後の展開を工夫する。

要点④ 児童生徒自身の成長の実感や達成感の獲得

- 学びの履歴や足跡をまとめたものを作成し、いつでも見返せるようにする。
- 課題解決が難しかった場面を大切にし、粘り強く試行錯誤した課程を丁寧に振り返る。
- 即時、授業後、単元後など、成功した理由や振り返った内容を自分の言葉で表出する機会を繰り返
し設定する。

↑ 各学部研究にはさらに詳細な要点が掲載されていますので

ぜひ過年度の研究紀要もご覧ください。

（研究紀要は職員室の棚に入っています→）

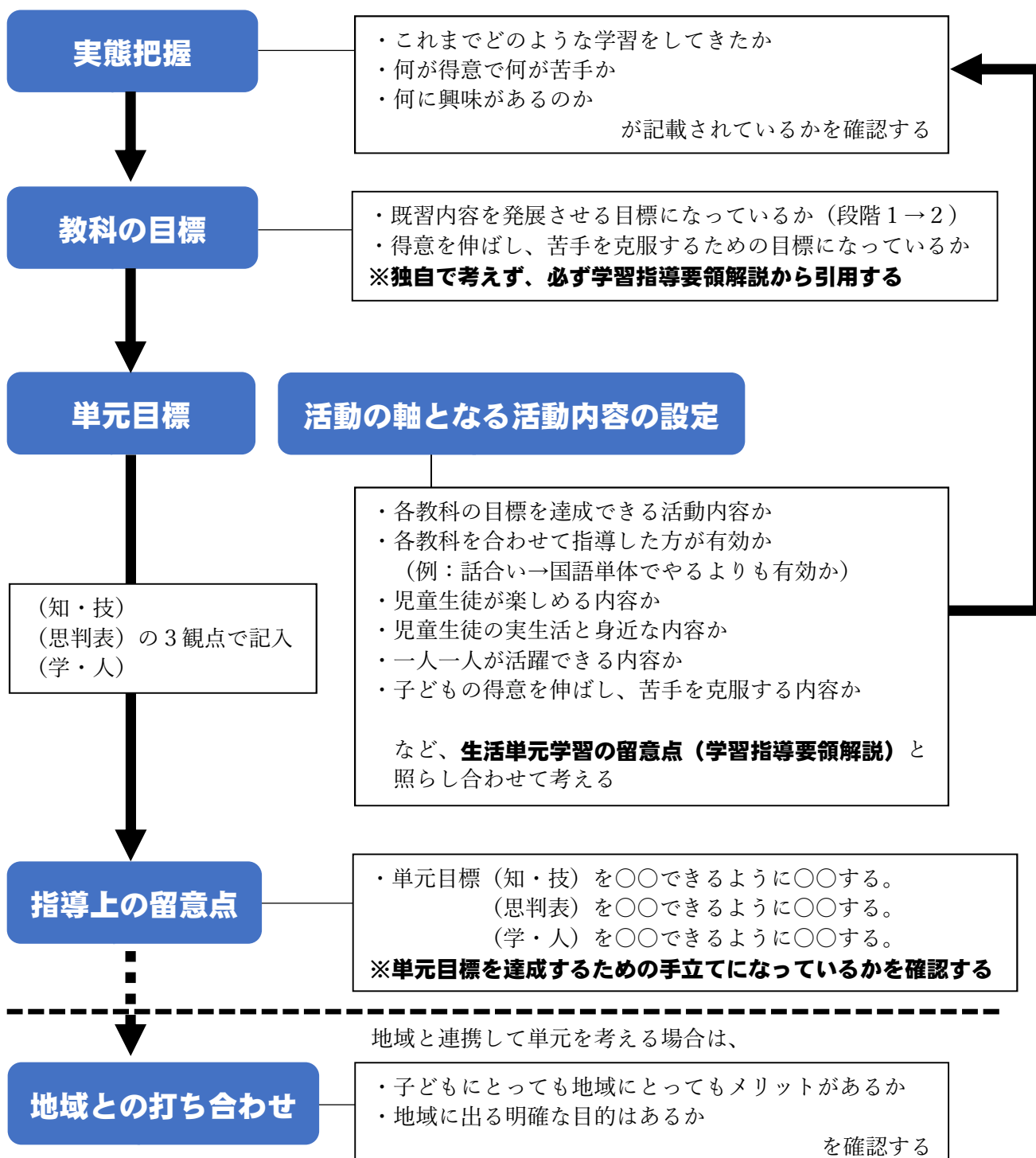




授業研究会の指導案をみんなでチェック



【指導案の1ページ目：生徒観・単元観・指導観】



地域を活用するメリット

- ① 多様な評価機会が得られる（大きな達成感につながる評価がもらえる）
 - ② 各教科の資質・能力が、本当に身に付いたかを社会生活に近い場面でチェックできる
 - ③ 活動のゴールを明確にできる。地域の方々に比内支援学校のこと（頑張り）を知ってもらえる
- 地域を活用するのはあくまで手段。メリットを最大化するためには地域と目標を共有することや前後の単元とのつながり、同時期に実施する他教科（国語・数学など）との関連付けなどを考えるとよい。

【指導案の2ページ目：指導計画】

・単元目標に入っている「主たる教科」以外の教科が内容に入っているもよい。

(例) 単元目標：主たる教科・・・理科・職業・家庭

小単元1で扱う内容・・・理科・数学

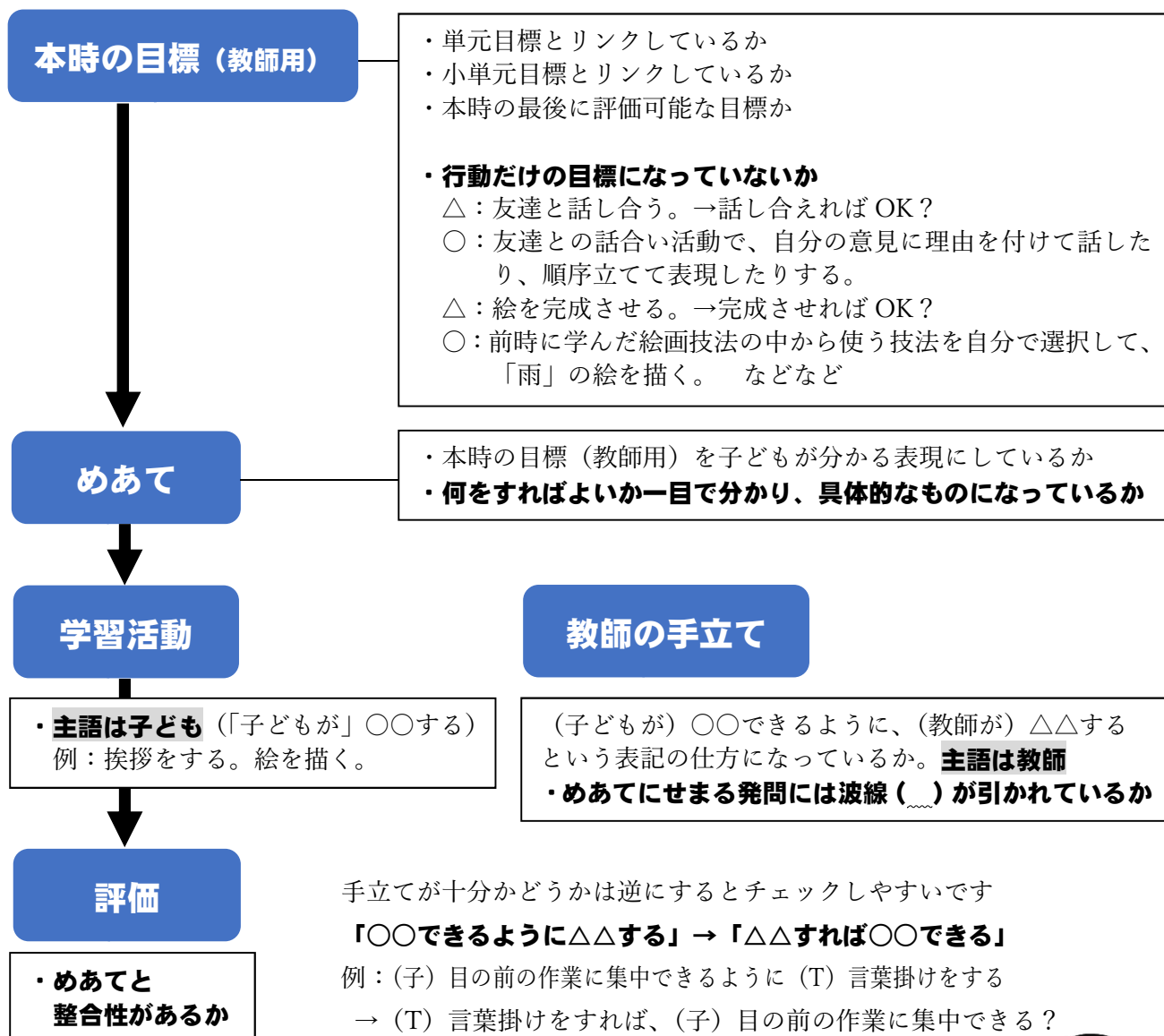
小単元2で扱う内容・・・社会・国語

小単元3で扱う内容・・・国語・職業・家庭

OK

「目標」を達成するために、「主たる教科」ではないほかの教科の「内容」が入ることも想定される。あくまで大単元の「目標」達成のための「内容」であることを確認する。

【指導案の3ページ目：本時の流れ】



手立てが十分かどうかは逆にするとチェックしやすいです

「○○できるように△△する」→「△△すれば○○できる」

例：（子）目の前の作業に集中できるように（T）言葉掛けをする

→（T）言葉掛けをすれば、（子）目の前の作業に集中できる？

※逆にしたときに違和感があれば、手立てに改善の余地あり。

